

【優秀賞】

青いセーラー

末岡美奈子・東京都

「ずいぶん処分しちやつたんだねえ、がんばりすぎじゃない？」

父の様子を見に行つた私は、あまりに変わつた家の中の状態に驚きを隠せなかつた。
「すごいだろ？ 今流行りの終活を、毎日こつこつ実行してるんだよ。」と父は少し自慢げに
答えた。

認知症の症状が進んだ母が施設に入居したため、夫婦離れ離れの生活を余儀なくされて
から一ヶ月もたたないうちに、今度は父の体に癌が見つかつた。

検査入院から自宅に戻るやいなや、父は何かに取り憑かれたように、ひとり黙黙と身辺
整理をし始めた。

家具や食器などはすでに必要最小限の物しか残つておらず、何百冊もあつた本やお気に
入りのDVDも、きれいさっぱりと棚から消えていた。がらんとした室内は、例えよう
もない物悲しい雰囲気が漂つていた。

「じや、何か私に出来る事はない？ そうだ、衣替えは？ そろそろ春夏物の準備して、
冬物はクリーニングに出さないとね。」

私の質問に対し、父は小さく首を横にふつた。「自分でできるから大丈夫。心配してく
れてありがとう。薄い洋服は、ほらもうここに出してある。それに…、冬の服は…もうい
らないだろう。」

予期せぬ父の返答に動搖した私は、返す言葉が見つからず、「何言つてるの？ 冬の服、
まさか全部捨てちやうつもり？ 寒くなつて慌てて服が無いつてなつても知らないから。」
と言うのが精一杯だつた。父は笑顔で一言、「そうだな。」とだけ呟いた。

片づけが一段落した所で、「桜でも見に行くか？」と父が言つた。丁度満開を迎えていた
桜並木を歩きながら、私は父の言葉を思い出していた。担当の医師から余命宣告されたわ
けでもないのに、自分自身の命尽きる時がわかるのだろうか？ 前を歩く父の後ろ姿がい
つもより小さく見えた。

それから、三日に一度父の元を訪ねるという日々がしばらく続いた。ある日、こつそり
と洋服だんすを開けてみると、ハンガーにかかつていたコートやジャケット、そして引き
出しにあつた厚手のセーターやズボン、冬用の下着類まですべてが無くなつていた。
「子どもたちには迷惑をかけたくない。」が口癖だつた父は、邪魔にしかならない遺品を
残すことに、強い罪悪感をいだいていたに違ひない。

7月に入ると、父は突然体調を崩した。そして、三ヶ月後、静かに息を引き取つた。
父を失つた悲しみは、想像していたよりも遥かに大きかつた。町の至る所でクリスマス
イルミネーションが輝く、華やかな季節になつても、私の心は重く沈んだままだつた。
12月24日の朝、我が家に心当たりの全くなない小包が届いた。荷物を受け取つた夫は、「お
い、何か届いたよ。」と大きな声で私を呼んだ。「誰から？ クリーニング屋さん？」

訳がわからないまま封を開けると、見覚えのある青いセーターが現れた。「これ、私がお父さんにプレゼントしたセーターだ。」夫にそう伝えると、同封されていた手紙を手にとった。

手紙を読み終えた私は、ビニール袋を破いて、セーターを取り出した。そつと顔を近づけた時、涙がこぼれ落ちた。

長いつき合いのあつたそのクリーニング店の店主と、父は生前一つの約束をしていた。手紙には、父が店主に告げた言葉が、丁寧に記されていた。

「自分は今病気ですが、がんばつて次の冬にもう一度このセーターを着たいと思っていきます。でも、このセーターが必要となる頃になつても引き取りに来なかつたら、その時は娘に送つてもらえませんか? これは、娘がイタリアで大奮発して買つて来てくれた、本当に大切な宝物なんです。」

父はこのセーターを着ると、「いいなあ、やつぱりイタリアの青は違うねえ。これ着ると10才は若く見える。」といつも言つていた。

私は涙声を必死で抑えこみながら、店主にお礼の電話をかけた。父の遺品が何も無かつたから、最高のクリスマスプレゼントになつた旨を伝え、受話器を置いた。

痩せ形の夫に、父のこのでつかいセーターが合わないことを承知の上で、私は夫に尋ねた。「ねえ、このセーター着てくれる?」

「それはどう考へても無理でしょ? おまけにこのセーター、なんだかお義父さんにおいがするぞ。」夫の返事に、私は思わず吹き出した。父の死後、初めて私に笑顔が戻つた瞬間だった。

父が亡くなつて二回目の冬が、間もなくやつて来る。クローゼットにかかつた青いセーターに、「お父さん、今年は暖冬になるみたいだよ。」と声をかけると、静かに扉を閉めた。